

---

# 不器用なあいつの彼女

こーしょー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不器用なあいつの彼女

### 【Nコード】

N1340B

### 【作者名】

こーしー

### 【あらすじ】

崎原尚好と美原五月の恋。その裏には、伝えられることのなかった一人の少女の想いがあった……読む前にご注意ください！本作品は同作者の『不器用な僕の彼女』の続編となっておりますので、一応こちらから読んでも問題ないように努力はしておりますが、出来れば本作を読む前に、『不器用な僕の彼女』をお読みになることをおすすめしますm(\_\_\_\_)m

く前編く（前書き）

いやーホントお待たせしました（汗）

計六回の大幅な加筆修正を経て、ようやく前編が、皆様に読んで頂けるところまでになりました（続きは……もう少し時間を下さい）。

前作「不器用な僕の彼女」から数ヶ月……こーしょーの成長をどうぞご覧あれっ！（成長していない可能性大……）

あ、あと後書きの方でちょっとしたお知らせがありますので、そちらもご覧下さい。

く前編く

もしも彼女が、事情を良く知っている誰かに『貴女は自分がしたことを今でも後悔していないのか』と訊かれて、『後悔なんかこれっぽっちもしてない』と答えたら、それはきつと嘘だ。

確かにスタートの時点で、多少の点差は開いていたが、それも取り返せない程の大差ではなかったし、逆転のチャンスだって結構あった。

だと言うのに、結局彼女はそのチャンスを自らの意思でことごとく棒に振り、あまつさえ敵に塩を送るような真似までしたのだ。

その結果、点差は更に開き、今や、彼女がどう足掻こうが逆転なんて夢のまた夢、なんてレベルにまでなってしまうている。

それなのに。

あの時告白していたらあるいは、なんて仮定を、彼女は何度も繰り返してきた筈なのに。

その度に何度も、何度も何度も、後悔してきた筈なのに。

それでも彼女　都野綾里つのあやりは『後悔なんてこれっぽっちもしてない』と笑って答えるのだろう。

.....

夏休みも半ばを過ぎたある日の、時刻は午後三時まで後五、六分

を残すのみ、といったところ。

駅前広場のベンチに綾里は一人、ジーンズを履いた両足をぶらぶらとさせながら腰掛けていた。

夏休み真っ只中と言うこともあるのか、駅では普段の倍以上の人間が往来を繰り返している。

大きな旅行鞆を持った親子連れ。

仲の良さそうなカップル。

休日返上で働く、スーツ姿の成人男性。

テニスラケットを背負ったジャージ姿の学生。

犬の散歩をする女性。

様々な人々が、綾里のことなど視界に入っていないかのように彼女の前を横切っていく。

綾里もそんな人々の様子を、何処か焦点の定まっていない瞳でぼんやりと眺めている。

もちろん彼らは、綾里が一时间ほど前からずっとベンチから立ち上がっていないことなど、知る筈もない。

「……………」  
ふと見上げれば、目が痛くなるような雲一つない青空が広がっている。

それなのに、

「……………うあー」

見る者の心まで晴れ晴れとしてくるような澄み切った青空を仰いで綾里は、『あたしの人生もう終わっちゃったのです』とでも言うような、恐ろしく低い声を漏らした。

「あー……………」

十二秒続いた後、徐々にフェードアウトして消えていったその呻きに込められていたのは、これから会う人間への不安と、同時に胸

をよぎる、誰にも知られること無く終わった初恋への隠し切れない未練。

「どうかしたの都野さん？」

「っ！？」

突然の問いかけに、慌てて顔を下ろす。

切れ長の鋭い瞳に、記憶の中に残る面影よりも幾分か伸びた、セミロングの黒髪。

同性である綾里から見ても悔しいほどに美人である。

笑えばさぞ綺麗であろう整った顔に、表情らしい表情は浮かんでいない。

初対面の人間が真っ先に浮かべるイメージはきっと、氷の女王、といったところだろうか。

綾里の元先輩であり、心の中での元ライバル、そして今では親友でもある美原みはら五月いつきが、彼女の目の前に立っていた。

「いつ、いえいえ何でもありませんですよっ！？」

「？ ならいいんだけど……それにしても都野さん早いわね。もしかして結構待たせちゃった？」

「だっ、大丈夫です！ あたしもさっき来たばかりだったですからっ！」

まさか待ち合わせの時間六十分前から待っていましたなどと、口が裂けても言えない。

もしうつかり口を滑らせてしまえば、五月は絶対に気に病んでしまうのが目に見えているからだ。

例え、綾里が勝手に早く来ていただけで、五月の側に少しも非は無くても、である。

「そ……そう？」

「そそっ、そうですそうですっ！ あ、ホラ、立ち話も何ですし、とりあえずあそこの喫茶店行きませんか？ この前初めて行ったん

ですけどケーキセットが値段の割りに結構美味しくて！　ねっ、  
そうしましょ！？」

突然の提案に戸惑いながらもまだ何か言いたげな五月の背中をぐ  
いぐいと押して、綾里は人混みの中へと入っていった。

.....

二人の関係の始まりは、およそ一年前、五月がまだ高校に在籍し、  
吹奏楽部の部員だった頃にまで遡る。

「都野さん、よかつたら今日、一緒に帰らない？」

綾里にとっては全く予想外の出来事だった。

いつものように部活が終わり、帰り支度を済ませたところに、い  
きなり背後から話しかけられたのだ。

それ自体は驚くべきところでもない。

入部して一ヶ月も経てば、知らない人間ばかりだった部内にもそ  
れなりに親しい人間が出来るし、その屈託の無い性格から男女問わ  
ず人気がある綾里にとって、一緒に帰ろうと誘われることはそう珍  
しいことでもなかった。

問題は、その誘ってきた相手が、彼女が部内で一度も会話らしい  
会話をしたことがなく、そして唯一敬遠している美原五月その人だ  
ったからである。

「.....」

「.....」

とりあえず承諾はしたものの、会話も無いまま、街灯の明かりが  
点々と続いている薄暗い道を二人並んで歩く。

誘ったからには何か用件があるのだろうか、歩き始めて十数分が経っても、五月の方から何かを切り出そうという気配は伝わっていない。

このままでは間がもたないと判断した綾里が、状況を打開しようと意を決して話しかける。

「え、えーと……あたしって自分でも気付かないうちに先輩に何かやらかしちゃいました？」

そうでもなければ五月が自分から話しかけてくることなどないと考えての発言である。

「？ どうしてそんなこと訊くの？」

質問の意図が掴めない、といった風にほんの少しだけ眉根を寄せ、首を傾げる五月。

そんな微妙な表情の変化に気がつけるほど親しい付き合いでもなく、どこか咎めるような言葉と起伏の少ない声色に、マズイ怒らせってしまったと軽く萎縮する綾里。

「い、いえっ、そんなっ、だ、だって今まであたし、美原先輩と話したこと無かったですし……」

「……ああ、言われてみればそうよね。一応訊くけど、何か心当たりでもあるの？」

五月本人としては少しからかったつもりなのだろうが、じっと見つめてくる切れ長の瞳は暗に何かを問い詰めてきているような気がして、全く生きた心地のしない綾里。

「いつ、いえ、そんなの全く無いです……けど。……でもそれならどうかしたんですか？」

「それなんだけどね……ちょっと……訊きたいことがあって」

至極当然な綾里の疑問に、五月の言葉の歯切れが一転して悪くなる。

「訊きたいこと、ですか？」

「ええ……」

こくりと頷いたものの、その次の言葉が中々紡がれない。



五月のその、所謂『もじもじ』とした様子は、いつも気丈に振る舞い、他人を寄せ付けないオーラを発している姿しか知らない綾里に軽い動揺を与える程の威力がある。

そんな綾里の心の内など知る術を持たない五月は、数秒の逡巡の後、躊躇いがちに口を開いた。

「崎原君の、ことなんだけど……」

「……………へ？」

二度目の予期せぬ攻撃に、綾里の思考回路が完全に停止する。不意打ちに怯んだ隙に、必殺の一撃を急所に叩き込まれたような、そんな感じである。

五月はそんな綾里の様子にもやはり気付かず、更に続ける。

「彼最近何だか練習に身が入ってないって言うか、態度が余所余所しいって言うか……とにかく何かおかしい気がするのよね。そろそろコンクールも近いから練習熱心なのは分かるんだけど、それで体壊しちゃったら元も子も無いわけじゃない？ だからその……体調悪いんだったらあんまり無理してほしくないかなって……」

なまきはいつまでも  
崎原尚好。

五月と同じトランペットパートに所属し、綾里の同級生、つまり五月の後輩である彼は、この約半年後、吹奏楽部第43回生追い出しコンサートの打ち上げ会の席にて五月に告白するのだが、それはまた別のお話、というやつである。

「え、えーと……」

綾里はその原因を知っていた。

知ってはいたが、それは、本人に頼まれでもしない限り、他人の口から話していいものでは決してない。

「どうかしたのか訊いてみても大丈夫の一点張りだし……ほら、都野さんって崎原君と仲良いじゃない？ 二人で楽しそうに話してるの良く見かけるし……だから何か知らないかなって思ったんだけど

……」

考えようによっては体調不良と言う五月の推測もあながち間違いではない。

病という漢字で表すことが出来る以上、恋煩いも立派な病氣の一種である。

「わ、分かんないです……あたしと喋ってるときは全然そんな感じしないですし……先輩の気のせいじゃないでしょーか？」

数秒の脳内会議の末、綾里は『ここは嘘を吐くべきである』という結論を下した。

「そう……都野さんも分からないの……」

幸いにも嘘はばれなかったらしく、五月はそう呟いたきり、口元に手の甲を添えて何事か考え始めた。

「う………」

ばれないに越したことはないとしても、全く疑われないとなると、それはそれで何だか申し訳なくなってくる。

「……だっ、だーいじょうぶですよおそんなに心配しなくたって！無理してぶっ倒れて、先輩に迷惑かけちゃう程さっきーだって馬鹿じゃないですよ！」

フォローのつもりで努めて明るく言った言葉はしかし、

「うん……私もそれは分かってるんだけど……」

その言葉の内容とは間逆の、全く分かっていない口調の一言にあっさり一蹴された。

「……………」

「……………」

沈黙は重く、時間ばかりが過ぎる。

二人の歩調は普段よりも遅く、その歩幅も同様に狭い。

歩き始めてから結構な時間が経っているような気がするのに、振り返ればまだ校門が見える距離である。

「……さっきーのこと、そんなに心配なんですか？」

そんな筈ないと心で全否定したがっていても、頭の片隅にある冷

静な部分では、漠然とではあったが、この時点ではほとんど分かっていた。

だから彼女のこの言葉は、質問というよりも確認だった。

「……え？ え、ええ、だってその……ほら、私と崎原君って同じパートだし、後輩なんだから当然でしょう？」

先程のもじもじした様子と言い、今のしどろもどろに弁明する様子と言い、綾里に言わせれば全く五月のイメージではない。

美原五月はいつも冷徹で、無愛想で、愛想が無くて、人を寄せ付けないようなオーラを発していて、同姓の綾里から見ても凜としていて格好良くて、

だからこんな、

「……先輩ひょっとして、さっきーのこと好きだったり？」

まるで『崎原尚好に恋でもしている』ような仕草は五月らしくないし、綾里は彼女『にまで』そんな仕草を見せて欲しくなかった。

しかし、

「……………」

綾里のその何気ない風を装った言葉を肯定するように、五月の顔は真っ赤に染まった。

「……やっぱりその反応だと凶星って感じですね」

この瞬間。

すなわち、美原五月も崎原尚好に好意を抱いていて、二人が両想いなのだという確信を持った瞬間。

「ふう……しよーがないですね」

わざとらしいため息を一つ吐いて、五月の数歩前に出て、

「……？」

ほんの少しだけ怪訝な表情を浮かべた彼女の方へと振り返ると、  
「恋する乙女な先輩のために、このあたしが二人のキューピッドとして一肌脱いだとしますかっ！」

自分では極上だと思っている満面の笑みを顔に貼り付け、都野綾里は自らの想いに蓋をした。

.....

「えと、それじゃ先輩、改めましてお久しぶりです」

駅前広場から綾里お勧めの喫茶店へと場所を移し、綾里は注文したケーキセットを目の前にしてぺこりと頭を下げた。

ビルの合間にひっそりと佇むそこは、椅子やテーブル、内装に至るまで全てアンティーク調で統一しており、綾里達女子高生には人氣が高い。

「ああ、そう言えば会ったのは卒業して以来だものね。うん、こちらこそお久しぶり」

ほんの少しだけ微笑みながら、紅茶の入ったティーカップに口をつける五月。

友人関係になってからそろそろ一年、五月はようやく、綾里にもそんな表情を見せてくれるようになった。

「んー……何かアレですね、しょっちゅう電話してたから、全然久しぶりって感じしないです」

「私もそんな感じ……あ、そう言えばごめんなさいね、コンクールの演奏聴きに行けなくて。電話でも言ったけど、金賞受賞おめでとう」

「あつ、いえいえいそんな、先輩の方も忙しかったんですから仕方ないですよ。それに金賞って言ってもダメ金でしたし……」

一つの地区の吹奏楽コンクールにおいては、一位に金賞、二位に銀賞、三位に銅賞がそれぞれ与えられるわけではなく、各団体の技量によって、金、銀、銅の賞が与えられる。

つまり、その年のレベル次第では、金賞を受賞する団体が複数存在することもある。

しかし、県大会に出場出来る団体は各部門ごとに大抵二つと決まっているので、二つ以上の団体が金賞をとった場合は、金賞なのに県大会に出場出来ない団体が発生してしまうのだ。

そしてそういった、県大会に出場出来ない金賞のことをダメ金と呼ぶのである。

「でも去年と一昨年在銀賞だったこと考えたら大した進歩じゃない？ この分なら来年には期待出来るそうね。今日は練習お休み？」

「そうですよー。大会終わったんでようやく私たちも夏休みですよー

……あー、宿題やだなー……」

「んー、まあ高校生の本分は勉強なんだし、頑張らなきゃね。今のうち頑張っておけば後で有利になるんだし」

「それは分かってますけど……あーあ、羨ましーなー大学生さんは」 会う前までは憂鬱な表情を浮かべていた綾里も、いざ本人に会ってみれば楽しそうに話をしている。

そうして世間話に華は咲き、三十分ほどの時が過ぎた。

「えっと、それですね先輩、電話で言ってた相談事ってのは……？」

ケーキセツをぺろりと平らげ、四杯目の紅茶のお代わりを注文してから、綾里はようやく切り出した。

「ええ……そのことなんだけど……」

途端、先程までの和氣藹々さはどこへやら、何か言いずらそうに口ごもる五月。

彼女がこういう仕草をするときは決まって尚好絡みの話題だという事を、綾里は知っている。

五月は尚好のことに關しては、いつもの冷静で大人びた、いわゆる『大人の女性』といった姿はすっかり影を潜め、年相応な（見ようによっては年齢にそぐわないほどに幼い）、一人の『恋する乙女』になってしまうのである。

「んー……あ。まさかやつちーと喧嘩とかしちゃったとか？」綾里の脳裏を、夏休み最後の練習日の、どこか元気が無いというか、全身から何かに疲れたような雰囲気醸し出していた尚好の姿がよぎる。

何だか近寄りがたくて何も訊かなかったが、もしも五月と喧嘩していたというのなら、あの様子も、彼なりに落ち込んでいたのだと納得できるのだが、

「うつん、そうじゃなくて……」

五月は首を横に振った。

「？ それならどしたんです？」

綾里の頭の中では、疑問符ばかりがどんどん増えていく。

そもそも今回の、数ヶ月ぶりになる二人の会合は、五月からの提案を端を発している。

親友として、久しぶりに会って互いの近況を報告しようというのも、目的としてあったかもしれない。

それでも、『相談したいことがある』と言って呼び出したのだから、電話では話づらいような相談事があるのだろつと綾里は考えていた。

下手な考えよりも本人の口から聞いた方が早いと判断し、五月が

話し出すのをじっと待つ。

同年代であろう他の客の人間達の明るい笑い声が響き、クラシックのBGMが流れる落ち着いた雰囲気の中、やがて、

「……………最近何だか私、避けられてるような気がするの」

躊躇いがちに、五月はそう言った。

「避けられてるって……………さっきーにですか？」

浮かない顔でこくり、と頷き、先程からさっぱり減っていないシヨートケーキの端をフォークで切り取りながら、五月はぼつりぼつりと話し始めた。

その断片的な言葉を繋ぎ合わせ、要約するとこんな感じになる。

今から遡ること約一年前。

突然の尚好の告白から始まった二人の関係は、遠距離恋愛特有の寂しさと不安から一時は破局寸前にまで陥ったものの、紆余曲折の末どうにか持ち直し、最終的には二人の絆も深まった……………筈だった。

最初の変化は半月ほど前、夏休みが始まったばかりの頃である。それまで尚好から毎日来ていたメールが、突然来なくなった。

五月の方からメールを送ってみても、返事が来るのはそれから何時間も経った後で、内容もどこか簡素と言つか、素っ気無い。

電話をかけてみても、コール音の末に留守番電話センターに接続されるケースが殆どで、たまに繋がったとか思えば『悪いんだけど今忙しくて』と、二言三言も会話をしないうちに一方的に電話を切られてしまう。

この時点では五月も、恐らく尚好は部活で疲れているのだろうと自らを無理矢理納得させ、あまり悪い方向には考えないようにしていたのだが、コンクールが終わっても、相変わらず連絡は来ないまま。

結果を知ったのも、綾里からのメールでだった。

こうなってしまうと嫌な予感や不安といった類のものはどんどん膨らんでいく。

流石にこれは何かあると直感した五月は、帰省してすぐに崎原家を訊ねたのだが、尚好は家におらず、出迎えてくれたのは彼の母親だった。

そしてそこで彼女は、尚好が最近夜遅くになるまで家に帰ってこず、行き先を尋ねても何故か教えてくれなくて困っている、という話を聞かされる。

「……えーと、すごい簡単にまとめちゃうんですね。つまり先輩としてはさっきーが浮気でもしちやってんじゃないかと不安で仕方が無いと」

「ちっ違っ！ わっ私はそんなっ、そんなわけじゃ、ない、けど……」

否定の意を表そうとした彼女の言葉は、出てきてすぐに勢いを失い、尻すぼみになって消えた。

しゅん、としよげかえる五月の姿を見て、綾里は小さなため息を一つ吐き、

「……あのですね先輩？ 別にあたしはそれのことについて何か物申すってわけじゃないんですから、いつそ正直に言っちゃって下さい。先輩は不安なんですよね？」

綾里の二度目の質問。

今度は否定の言葉もなく、五月はただ俯いているだけである。

「……先輩はさっきーのこと、浮気するようなやつだって思います？」

「そっ、そんなことない。尚よ……崎原君は浮気なんてしない……と思う……けど」



五月の口から『尚好』という言葉が出かったことに、二人の仲の親密さを再確認して胸がちくりと痛んだが、それでも平静を装う綾里。

「あたしだってそう思います。さっきーは先輩のことが本当に大好きなんですから。この前だってさっきー、先ぱ」

と、ここで綾里の言葉が唐突に途切れた。

「……？ 都野さん？ どうかした？」

「……あー……い、いえいえ、別に何もありませんですよはい」

どこか慌てた様子で、カップの冷めた紅茶をぐいっと呷る綾里。そして、こほん、と仕切り直すように小さく咳払いをした後、

「えっと……とにかく、先輩はもつとあの彼氏のこと信じたげて下さい。さっきーは絶対先輩を嫌いになつたりしませんから。メールとか電話とかしてこないのも……ほら、どうしても先輩には言えない、何か大事な理由があるんですよ、きつと」

「……大事な理由って？」

「う……さ、流石にそれは分かりませんが。とにかく、さっきーから何か言ってくるまで待つてあげましょ？ 彼女なんですから、もつとこう、どっしり構えてるべきですよ、どっしりと！」

必死ともとれる程に熱意のこもった綾里の励ましに、

「……そうね。私は尚よ……崎原君の彼女なんだもの……私が彼のこと信じてあげなきゃいけないわよね」

五月の顔に、多少ぎこちないものではあるが、ようやく微笑みが戻った。

どんなに気付かないふりをしたところで、その想いはまだ確かに存在している。

どんなに忘れようとしたところで、忘れたふりをしたところで、忘れられる筈もない。

彼女の中では、終わっていないのだから。

あの日、五月の気持ちを知った時点で、二人が両想いだと知った時点で、彼女は二人のためにと、自らの想いを閉じ込めてしまったのだから。

もしもあの打ち上げの日、彼女が尚好に何も言わなければ。

二人の想いは成就することなく完結し、そこに生じる心の隙間に、彼女がつけ入ることだって出来たのかもしれない。

だが、彼女にはそれが出来なかった。

彼のことが本当に好きだったから。

幸せになつて欲しかったから。

自分と同じものを背負つて欲しくなかったから。

だから、彼女は彼の背中を押したのだ。

その告白が、確実に実を結ぶものであると、あるいは自分の想いが実るかもしれないという微かな希望を断つものだと言った上で。

## く前編く（後書き）

とりあえず二つお知らせがあります。

一つ目。

誠に勝手だとは思いますが、「Love is All」の執筆を凍結させて頂きます。

理由は、まあ、最近色々と一杯一杯でして、複数作品を掛け持ちする余裕がなくなってしまいました（汗）

楽しみにしていて下さった皆様には、この場を借りて深くお詫びを申し上げますm（　　）m  
二つ目。

最近友人に誘われてmixiとやらを始めました。

作者のどうしようもない日常を覗いてみたいという奇特なお方、マイミク登録してやってもいいという心優しいお方。名前の方を教えますので、メッセージ下さいm（　　）m

く 中 編 く

その後、話題は再びお互いの近況報告へ戻り、二人が喫茶店を出る頃には、太陽はその半身を既に、西に見えるビル群の合間に沈めていた。

「本当にごめんなさい都野さん。こんな時間まで引き留めちゃって……」

「もー……だからそんな他人行儀なこと言わないで下さいよ。あたしも久々に先輩の顔見れて嬉しかったんですから」

申し訳なさそうな五月の言葉が不満であると主張するように、唇を尖らせて頬を軽く膨らませる綾里。

「……うん、私も久しぶりに楽しい時間を過ごさせてもらったわ。ありがと都野さん」

苦笑混じりの五月の言葉にとりあえず満足したらしく、笑顔で頷く綾里。

「それでいいんです。とりあえずさっきの件はあたしも少し調べてみますから」

「ええ、ごめ……ありがとう」

「ふふっ、何か分かったら連絡しますねー」

喫茶店の前で五月と別れ、自転車を停めていた駅の駐車場へと歩を進めながら、綾里は携帯電話を取り出した。

「……にしてもほんつとあたしってば昔っからこういう損な役回りばっかだわねー」

ため息混じりに呟きながら、アドレス帳から目的の人物を探す。

元恋敵の相談相手。更に言うなら、内容の大半が自分の好きだった男との恋愛に関するものである。

綾里の呟きは、そんな何とも言えない立場に置かれている己が身

を嘆くような口調ではなく、逆にその状況をどこか楽しんでいるような響きがあった。

「先輩の話だとこの時間につかまるか微妙かなー……ま、その時はメッセージでも残しときゃいいか」

目的の人物を見つけ、電話番号を表示させる。

電話をかける目的は一つ。

綾里の予想通りであれば、多分今頃五月とはまた違った悩みに頭を抱えているであろう彼氏に対しての、ちよつとしたアドバイス。

「よつし、それでは恋のキューピッドがまたまた一肌脱ぐといたしますかっ！」 努めて明るく言って、通話ボタンを押した。

「っ、っ、っ、つと……あ、もしもしさっきー？ 良かった良かった繋がった。綾里だけどさ、今ちよつとお話、いーい？」

.....

「……不満があるなら言えばいいのよ。不安があるなら聞いてみればいいんだし、そのせいで傷つけちゃったと思ったなら謝ればいいじゃない。相手が何考えてるのか分かる人間なんていないんだから。本音を口に出してぶつけ合って初めてお互いの気持ちって分かるんだよ？」

「.....」

「それが出来ないなら、自分の本音を見せるのが怖いんだったら、さっさと別れちゃうってのも選択肢だと思う。今の状態続けてくのはさっきーにも、先輩の為にもなんないだろうし」

戸締りよろしく、と小さく呟き、右頬を押さえたまま呆然と立ち

尽くす尚好に背を向けて、綾里は音楽室から出た。  
ずずつと鼻をすすり、涙で濡れた目尻を乱暴に制服の袖で拭いながら、電気が消された真っ暗な廊下を歩いていく。

何故、尚好に手を出してしまったのか。

『自分が五月と付き合っているのか、よく分からない』

相手が他者であって自己ではない以上、相手の心情を自己が完璧に理解することは不可能である。

それでも人は、互いを理解し合おうと努力する。

互いの心を共有し、少しでも自らと他者の距離を縮めようと、互いの思いを口にする。

だがそれを、尚好は否定した。

五月の心に踏み入ることを、自らの心に踏み入られることを恐れた。

そんな都合のいい考え方が、綾里には許せなかった。

それなら何故、今自分は泣いているのだろう。

「……………」

『お前みたいなの彼女だったら楽だったのになあ』

その一言が、どうしようもなく悲しかった。

そんなことを口にしてしまうほどに尚好の心が疲弊していたことが。

自らの気持ちを押し殺してまで幸せになつて欲しいと願った二人の心が、少しずつすれ違っていくのが。

そして何よりも、

『お前みたいなの彼女だったら楽だったのになあ』

その一言に怒りを感じた一方で、ほんの一瞬だけ、ぐらりと心が揺れた。

揺れてしまった。

尚好以上に自分自身が許せなかった。

ほんの少しだけ。

そう、ほんの少しだけ、綾里の心に、尚好の発言に喜びを感じた部分が、確かにあったのだ。

二人が両想いだと知った時点で、自らの胸に秘めた想いは、このまま伝えることなく断ち切ろうと決めた。

それを完全なものとするために、綾里は打ち上げの日、尚好に告白するように仕向けたのだ。

だが、それは飽くまでも断ち切った『つもり』だったのだと、心の奥底ではやはり自分は尚好を諦めきれていなかったのだと言う事実を、否応無しに目の前に突きつけられた。

「っ……ふ……」

こみ上げる嗚咽を必死に噛み殺し、綾里は未だにじんじんと痺れている左の掌をぎゅっと握り締めた。

.....

綾里が五月と久方ぶりの再会を果たしてから、二日が経った。

空は相変わらずの快晴。

駅前広場は今日も相変わらず、行き交う利用者達の姿で埋め尽くされている。

そんな、見渡す限り活気で満ち溢れている光景の中、

「……………うあー」

綾里は二日前と同じベンチに腰かけて青空を見上げ、『あたしの

人生今度こそもう終わっちまったのです』とでも言うような、恐ろしく低い声を漏らした。

「あー……………」

二十秒続いた後、徐々にフェードアウトして消えていったその呻きに今回込められていたのは、これから会う人間への不安のみである。

「……………何やってんのさお前？」

突然の問いかけにも動じずに、のろのろと顔を下ろし、声の主へと視線を移す綾里。

「……………や。はおはあー」

不審者でも見るような表情を顔に浮かべ、両手を腰に当てた姿勢で綾里を見下ろしている尚好の問いかけに、綾里は片手を上げながら、誠意の欠片すらも感じさせない挨拶で返す。

「……………おはようさん。それで？ 何でお前そんなにテンション低いんだよ？ 熱射病にでもかかった？」

「残念ながらあたしのまいていーぼでいーはそんなヤワじゃねーのですよ……………ってかさっきーの方こそ何でそんないつものテンションでいられんのかって方がおかしいと思うんですよ綾里ちゃんといったしましては」

「？ そりゃ、昨日のは勘違いされるようなシチュエーションだったけどさ。別に後ろめたいことしてたわけじゃないんだし、ちゃんと説明すればいつ……………美原先輩だって分かってくれるだろ」

「はあ……………さいでございますか」

心底呆れ果てました、とでも言わんばかりにわざとらしい大きなため息を吐き、綾里は視線を再び頭上に広がる青空へと戻した。

「む……………何だよその含みのある言い方は？」

「あたしは全っ然そんなつもりないけど？」

流石に腹も立ってくるのか、綾里の言い方は意識せずとも棘を含んでしまう。

この話が訳の分からない方向にこじれ、今ここで綾里がブルーに



なっているその最たる原因が（例え本人が無自覚でも）尚好にあるというのに、当の本人がこうもあっけらかんとしているのだから。

「何だってんだよ……あ、いつ……先輩っ！」

五月を呼ぶ尚好の声に、慌てて視線を元に戻す。

「……お早うひさ……崎原君と都野さん」

尚好の前だからなのだろう、五月の態度は、いつもの毅然とした、冷静沈着な『美原五月』のそれだった。

が、何も浮かんでいないはずのその表情は、疲労感と悲壮感、言わねばダウンナーな雰囲気醸し出している。

今の五月は、放っておいたら何処かのビルの屋上から飛び降りそうなほどに危い。

「いつ……先輩、どうかしました？　どっか具合悪いか？」

察しが悪いと言うか何と言うか、誰のせいで五月がそんな状態にあるのか、尚好は本当に気付いていないらしい。

「あんたって人はホント……」

「な、何だよ？」

「あーもういいからっ。とにかくほら、あそこの喫茶店行きましょ。詳しい話はそっからっでことで。先輩もそれでいいですよね？」

「……え？　ごめんなさい、もう一度言ってくれない？」

「……………」

綾里は無言のまま五月の手をむんずと掴み、動揺する彼女をそのまま二日前に二人で入った喫茶店へと引きずっていく。

「……あ、ちよ、ちよっ待てってば！」

そんな二人の様子を啞然と見つめること数秒、我にかえった尚好は、慌てて後を追いつめた。

……………

二日前、綾里と五月が来た喫茶店の丸テーブルに、それぞれ向かい合って座る。

前回と違うのは、何だか落ち着かない様子の男子高校生が一人増えているのと、三人を包む雰囲気の違い。

「ええと……その……ご注文は？」

険しい空気を察しているのかウェイトレスが恐る恐る、といった風に、注文をとりやつてきた。

「あ、ええと……あたしレモンティーで」

「あ、じゃあ俺も。いつ……美原先輩はどうします？」

「……え？ 何か言った？」

「……レモンティー三つでお願いします」

逃げるようにカウンターに戻るウェイトレスを視界の隅に捉えながら、綾里は小さくため息を吐いた。

……さて、どう切り出したものか。

そもそも何故このようなことになっているのか？

それを知るには、時間を二日前　綾里が尚好に電話をかけたところまで遡る。

.....

「つ、つ、つ、つと……あ、もしもしさつきー？ 良かった良かった繋がった。綾里だけどさ、今ちよつとお話、いーい？」

『あー悪いけど俺今忙しいから』

「あんと五月先輩についての大事なお話なんだけど、それでも忙

しいの?」

『……ちよつと待つてろ。すぐかけ直す』

そうして電話が切れた数分後、バイブレーションと共に、綾里の携帯のディスプレイに『さつき』の名前が表示される。

「いやー悪いわね」

『……どうでもいいような内容だったらずぐ切るぞ』

「どうでもよくないわね。簡単に言っちゃうと、あんた先輩に疑われてるわよ? 浮気でもしてんじゃないかって」

『……はあ?』

綾里は尚好に、今日五月に会って相談されたことを全て話した。

半月ほど前からの態度の変化。

途絶えたメール。

遅い返事と、素っ気無い文面のメール。

切られる電話。

五月の訪問。

そこで訊かされた尚好の謎の行動。

『……ええと、それでお前、先輩に何て?』

「そりゃあたしだって鬼じゃないからね。彼氏のこと信じなくてどうすんですか? ってちゃんと言つといたわよ」

それを訊いて幾らか安心したのか、尚好の身の縮むようなため息が、受話器を通して聞こえてきた。

『……ひとまずさんきゅー』

「さんきゅーじゃないわよ全くもー。なんであんたの浮気の尻拭いをあたしがしてやんなきゃなんないわけ?」

『浮気じゃないよ……これには深い事情が』

「冗談よ。さっきのことだからどうせ、先輩の誕生日が近いってんで、バイトしてお金ためて凄いもんプレゼントしようとか考えてんでしょ?」

『……っ』

図星だったのだろう、尚好が息を呑んだのが、気配で分かった。

『お前……エスパーか何かだったの?』

「あんたとの腐れ縁も何だかんだで三年目だからね、ある程度だったら考えてることお見通しなのよ」

五月を励ましているとき、思い出したのだ。

夏休みが始まる直前　ちようど五月が、尚好の異変に気付いた頃である　の部活終了後のことである。

あ、あのさ、都野。ちよつと訊きたいことがあるんだけど。

んー?　何さ改まっちゃって?

いや、その……お前だったらさ、誕生日プレゼントに何ももらったら嬉しいと思う?

……はっはーん、先輩の誕生日が近くて、彼氏としては何かプレゼントしようと思ったわけだ?

う……だつてさ、僕そんな経験今までなかったから、何あげたら喜ぶのか分からなくて……だから……。

んー、まああたしだったら、好きな人からのプレゼントだったら何もらつても嬉しいかな。

いやそんなじゃなくて、もつとこつ具体的な返答を……。

あーもーそんな自分で考えなさいつ。あたしは五月先輩じゃないんだからつ。

こんな内容の会話をしていたことを。

「それで?　お金の方は貯まったの?」

『まあ、一応は……でも』

「でも?」

『何をプレゼントすりゃいんだか……お前に言われて色々考えたん

「ただどやっぱり思い浮かばなくてさ。とりあえず何でも買えるようにってお金だけは稼いだんだ」

「……そんなことだろうと思ったわよ。ま、だから電話かけたんだけどね」

『……?』

「先輩の誕生日はいつ?」

『え? あ、え、えっと……あ』

「どうしたの?」

『……明後日だ』

「……あーもーあんたはホントに何て言うか、馬鹿よね」

『う……』

「……ったく、仕方ないわね。明日、駅前集合。お昼はあんたの奢りね。それくらいの報酬はいいでしょ?」

『え?』

「だーかーらっ、あたしが誕生日プレゼント選んであげるって言うてんじゃないの!」

『あ、さ、さんきゅー! ホントに助かる!』

「さ、先に言つとくけど、あたしの好みで選ぶから。先輩の好みと違っちゃってたってあたしは知らないからねっ」

く後編く

……そして翌日、二人は五月に似合う誕生日プレゼントを求めて駅前を散策していたところ、運悪く偶然その場を通りかかった五月にその現場を目撃されてしまった。

浮気でもしてるんじゃないかと疑っていたことも相俟って、五月は尚好と綾里が裏で付き合っているのだと完全に誤解。

五月がまともに話せる状態じゃないと悟った綾里は、詳しいことは明日話しますとその場は一時解散し、今に至る、というわけである。

「えーと、先輩？」

「……………」

この状況を打破するため、綾里が意を決して五月に切り出す。

「とつても簡単に言ってしまうですとすね、昨日はその、尚好にちょっと買い物に付き合っただけで欲しいと頼まれまして、あたしはそれで仕方なく付いてってやっただけで、ええと、決して先輩が思っているようなことは何もないんですっ」

言い終えてから、これじゃ逆効果だと気付く。

尚好からも『お前そんな言い方したら余計勘違いするだろ馬鹿野郎』という意味が籠った視線が送られている。

気まずい沈黙の中、とうとう五月が重い口を開いた。

「……いいの。そんな無理に嘔吐してくれなくても」

「いえ、ですから嘘とかそういうのじゃなくて……」

「本当はね。私、知ってたの。都野さんも、尚好のことが好きだったってこと」

「……っ！」

五月の突然の告白に、綾里の心臓がどくん、と跳ねた。頬が紅潮していくのが、鏡を見なくても分かる。

「……え？」

尚好は、呆然としている。

「あ、ええ、えと、その、せっ先輩いきなり何言い出してんですか！」

落ち着かなければいけないと分かっているのに、うろたえてしま  
う。

自分の想いは、もう伝えることはないと決めていたから。

こんなところで、こんな時に、伝わってしまうとは、思っていな  
かったから。

動揺する綾里に構わず、五月は続ける。

「あの年の四月に尚好が入部してきて、トランペットパートで一緒  
になって。こんな無愛想な私にも話しかけてきてくれることが凄く  
嬉しかった。いつも放課後遅くまで頑張って練習してて、努力家な  
んだなって思った。気が付けば、そんな尚好のことが好きになつて  
た。だけど、尚好の傍にはいつも都野さんがいた。仲良さそうな二  
人を見て、私、嫉妬してた。尚好と一緒に笑ってる都野さんが、  
羨ましかった」

そこにいるのは、尚好が知っている、いつものクールな『美原五  
月』ではなかった。

恋をして、恋に悩み、恋に苦しんでいる、一人の少女がいた。

一人の恋する少女が、瞳一杯に涙を溜めて、膝の上で両の拳を握り、  
何かに怯えるように、震えていた。

「だから私はあの日、都野さんを誘った。都野さんが、尚好のこと  
を好きなのか確かめたくて。私だって尚好のことが好きだってこと  
を言いたくて」

そこまで言って、大きくしゃくりあげる。

もう店の中の雰囲気は大変なことになっている。

店内にいた誰もが、五月の独白に耳を傾けていた。

が、当事者の三人にはそんな周囲の状況に気を配っている余裕は  
無い。

「都野さんが尚好のこと好きなのは、訊かなくても話していたらすぐに分かった。なのに都野さん、私のこと応援するって言ってくれて。だから私、それに甘えちゃって、都野さんも尚好のこと好きだって分かってるのに……だから、こんな私はひどい女だから。私に二人のこととやかく言う資格なんて無い……」

それきり、五月は何も言わなくなった。

店内は静まりかえり、五月のすすり泣く声だけが響く。

「……」

綾里には何も言えなかった。

憤りは感じない。

あの相談がそこまで計算されていたものであつたとしても。

自分が身を引いたのは、自分で考え、自分で決めたことなのだから。それでも、そのことが、五月をここまで悩ませていたことがショックだった。

「五月……」

どうにか、尚好が言葉を紡ぐと、五月ががたん、と音を立てて、椅子から立ち上がる。

「ええと、その、ごめんなさい。だから私のことはいいから。私はもう十分幸せにしてもらったから……ね？　後は都野さんを幸せにしてあげて？　崎原君、今までありがとう。さよなら……っ」

「え、ちよっ、五月！」

一気にそう捲くし立てると、尚好の静止も訊かずに、五月は喫茶店から出て行った。

ドアノブに取り付けられたベルが、大きな音を立てて鳴り響く。

「五月……」

追いかけてびれた尚好は、呆然とその場に立ち尽くしている。

「……ねえ、さっき」

意を決して、口を開く。

「な、何だよ？」

次の言葉を発する前に、大きく息を吸って目を閉じた。



これは、奇跡的に転がり込んできた、本当に本当の最後のチャンス。

今、ライバルはいなくなった。

出て行った彼女を追いかけようとしている彼の手を握ってでも、抱きついてでも、引き留めてしまえば。

それだけできつと、二人の立場は逆転する。

『ただの友人』は『彼女』に。

『彼女』は『ただの先輩』に。

ここを逃せば、自分の敗北は決定的なものになる。

だから、次に自分が発する一言で全てが決まる。

彼を自分のものにしたいなら。

数年越しの秘めてきた想いを、成就させたいのなら。

。

「あたしね、ずっとさっきーのことが好きだった」

彼女はようやく、自分の想いを、自分の口で、カタチにした。

「え？ あ、いや」

「けどね」

更に続ける。

「さっきーが先輩のこと好きなのはずっと知ってたから、言い出せなかった。だって振られるのが分かってるのに、告白するなんて馬鹿みたいじゃん？」

「綾里……」

「だからあたしは身を引いた。好きな人が好きな人同士で一緒にいることが一番幸せだと思うから」

……ああ、結局あたしは、どこまでいってもこんな役回りなんだな。

心の中で、自嘲気味に呟く。

「だから、あたしはさつきーのことが好き”だった”」

あの時告白していたらあるいは、なんて仮定を、彼女はまた繰り返す。

「さつきーは、美原先輩のこと、好き？」

その度に、どうしようもない後悔が、ちくちくと胸を刺すのだろう。

「……ああ」

だけどそれでも、彼女は背中を押す。

「だったら何してんのさ？ こんな終わり方でさつきーは納得できるの？ 出来ないでしょ？ 何迷ってんだか知らないけど早く追いかけなよ。絶対まだ間に合うから。あたしが保障したげる」

ずっと前から彼女が好きだった彼は、美原五月のことが好きな『  
崎原尚好』なんだと、分かっているから。

だから彼女は胸を張って、『後悔なんかしていない』と、精一杯の笑顔で強がれるのだ。

「……ああ！」

がたんと立ち上がり、先程の五月のように、店を出て行こうとして、

「綾里」

ドアノブに手をかけたところで立ち止まった。

「ん？」

「その……ありがとう。僕なんかのこと、好きになってくれて。そ

れと……ごめん」

その『ごめん』には、いったいどれだけの想いがこめられていたのか。

「っ……んなこといいからさっさと行きなさいよ、馬鹿」

必死に涙を堪える。

泣くなあたし。

まだ泣いちゃ駄目だ。

……もう少し、もう少し我慢しなきゃ。

「ああ！」

尚好は力強く頷くと、店のドアを開け放って外に出て行った。

「……あーあ」

嘆息して、天井のライトを見つめる。

「ほんっと、あたしってば昔っからこういう損な役回りばっかだわね」

二日前、呟いた言葉。

薄ぼんやりと輝く白色球が、涙で滲む。

「っふ……っく」

下唇を噛み締める。

温かい涙が、頬を伝う。

「はい、これサービス」

ことり、とテーブルの上に何かが置かれる。

視線をテーブルの上に戻すと、そこにはチョコレートケーキが載った白い皿。

充血した目で、いつの間にか傍らに立っていたウェイトレスを見る。

「よく我慢したわね。偉い偉い」

微笑みながら、ウェイトレスは綾里の頭をぽんぽん、と優しく撫でた。

「……っ」

何の事情も知らないはずの、彼女がどれだけ彼のことを思っていたかも知らないはずの、他人の言葉。

でもそれは、綾里が最も必要としていた言葉。

「……っふわああああああああん」

「うん、いっぱい泣いちゃいなさい。明日からまた笑えるようにね？」

この日ようやく、都野綾里の恋に、本当の意味で決着がついた。

この後、二人がどうなったかに関しては、敢えて語る必要はないだろう。

恐らくそれは、誰もが予想しうる結末だから。

だから、最後にもう一つ。

これは彼女が、彼に恋心を抱いた時のお話。

.....

綾里と尚好が、まだ一年生だった頃。

その年の高校吹奏楽コンクールの結果は銅賞。

県大会への進出は、叶わなかった。

コンサートホールでの表彰式を終え、楽器類を部員の父兄の車で学校まで運んでもらった後、駐車場の隅に集まって、ミーティングが行われていた。

「えっと……今年はこのいう残念な結果に終わってしまいました、皆は精一杯頑張ってくれてたと思います。頼りない部長だったけれ

ど、ここまで付いてきてくれて本当にありがとうございました」

このコンクールで部活を引退する部長が、目を充血させ、涙を拭いながら掠れた声で言う。

「……………」

この時綾里は、とてもいらいらしていた。

中々終わらないミーティングに対してではない。

他の部員たちの態度に、である。

部長をはじめとした三年生は皆、不甲斐ない結果に対して涙を流し、沈痛な面持ちで部長の言葉に耳を傾けている。

しかし、こうして部長が話している間に、一、二年生の数人が、小声で下らない話をしては笑っている。

それが、綾里には許せなかった。

先輩たちの苦労を笑っているように。

「……………それじゃ、解散にします。お疲れ様でした」

部長の話、連絡事項が終わり、号令と共に解散。

部員がそれぞれの帰路につくために散らばっていく。

そんな中で、ある部員とのすれ違いざま、綾里の耳にこんな言葉が聞こえてきた。

「あ……………やーっと終わったな」

「これで明日からは夏休みだ」

綾里の中で、何かが音を立てて切れた。

……………お前らみたいなのが。

もつとちゃんと頑張っていれば……………！

金賞が取れていたのかと問われれば、それは分からない。

結果として彼らは努力をせず、いい結果は残せなかったのだから。それでも。

今の一言で、先輩達の三年間を土足で踏み躪った彼らが、許せない。部活を辞める覚悟で顔面に一発ぶちかましてやろうと、綾里が振り返ったとき、

「ほんとっ、すいませんでした」

ぴたりと、動きが止まった。

声のした方に目をやる。

「そ、そんな謝らないで。 崎原君は十分頑張ってくれてたから……」  
そこにいたのは部長に頭を下げ、声を詰まらせ、涙を流す男子部  
員の姿だった。

「でも……僕、何か申し訳なくて……」

「大丈夫、崎原君が頑張ってたのは、私達皆知ってるから」

綾里も、その男子生徒の努力は知っていた。

いつも練習熱心で。

いつも、誰よりも遅くまで残って楽器を吹き続けていた。

だから、彼は泣けるのだろう。

先輩のために頑張ろうと。

誰よりも一生懸命だったから。

彼は先輩達と一緒に、涙を流せるんだろう。

「……………」

頬を殴ろうと握り締めていた拳から、力が抜けていくのを感じた。

……あいつ、崎原、なんて言うんだっけか。

綾里は、そんな彼のことを、もっと知りたいと思った。

……………

散々泣き喚いた後、綾里が喫茶店を出た頃には、太陽はその半身  
を既に、西に見えるビル群の合間に沈めていた。

「……………うん、何かすつきり」

今まで両肩にのしかかっていた荷物を、ようやく下ろせたような間隔。

同時に感じる、僅かな喪失感。

ポケットの携帯電話が震え、メールの受信を告げた。

取り出して、確認する。

差出人は、五月だった。

書いてあるのはたった一言。

『ごめんなさい。ありがとう。』

「……ふん」

何だかんだで元の鞘に収まったらしい。

両者共にお互いのことを好いているのだから、当然と言えば当然の結末ではあるが。

ぱたり、と携帯を閉じる。

「見てなさいよ。絶つつつ対、いい女になってやるんだから」

いつか、後悔させてやる。

自分を振ったあいつに、。

そしていつか、見返してやる。

クールなようにいて実は不器用な、あいつの彼女のことを。

綾里は夕暮れの空に向けて、決意を籠めた両の拳を突き出した。

く後編く（後書き）

……いや、もう何と言いますか、小説が全く書けなくなっていました。随分とまた、お待たせしましたが、ようやくこの『不器用なあいつの彼女』も、完結です。文章のおかしな点の指摘、感想、批評、このオチは納得いかない、なんて意見でも構いませんので、最後まで目を通して下さった皆様は、ぜひメッセージでも残していただけたらな、と思います。それでは、ここまで読んでくださって、ありがとうございましたm（――）m



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1340b/>

---

不器用なあいつの彼女

2010年10月8日14時14分発行